

梵文法華經の偈文における韻律の特徴

——初期仏典等との類似偈文句の対照を通じて——

西 康 友

1. はじめに

現存する梵文法華經 (*Saddharmapuṇḍarīka*: SP) 写本は仏典中、その本数が最多であり、整理すると中央アジア伝本 (CA) とギルギット・ネパール伝本 (G-N) の 2 つに大別できることが知られている¹⁾。SP 本文には中期インド＝アリア語 (MIA, 主にパーリ語)・仏教混淆梵語 (BHS)・古典梵語 (Skt.) が混在するため、初期 SP はもともと MIA 言語状況下で編纂され、伝承される中で梵語化された²⁾と考えられてきた (梵語化仮説)。だが、反論³⁾も多く、未だ統一的な見解には至っていない。

この梵語化仮説を示唆するものに、韻律に従わない SP 偈文が挙げられる。一般的に Skt. の接頭辞 *pr°*, *jñ°*, *st°*, etc. の直前の短母音は長母音化するが、このことで韻律に従わない SP 偈文が存在する。初の SP 写本校訂本『ケルン・南條本』(KN) を編纂した Kern は、当該箇所接頭辞の最初の二子音を一子音と見做せば韻律に従うと主張する⁴⁾。荻原・土田は KN 全偈文 (1232 偈) を検討し、Kern の主張を支持している⁵⁾。Edgerton は当該箇所が一子音として発音されていた可能性を示唆している⁶⁾。辛嶋は荻原・土田と Edgerton の研究を深化させ、現存 SP 写本偈文の異読 (写本間で読みの異なる語) を検討している⁷⁾。上記の研究者たちは、初期 SP が MIA から梵語化されたために、韻律に従わない偈文が存在すると主張する。しかし、SP 偈文では Skt. のままでも韻律に従うものも見られ、上記の主張には議論の余地がある。

本稿では、接頭辞 *pr°* を含む SP 偈文句に着目し、SP 偈文における梵語化仮説の可能性を議論する。

2. 梵文法華經写本における接頭辞 MIA *p°* / *pp°* と接頭辞 Skt. *pr°*

SP 写本において接頭辞 *pr°* を含む語は多く見出されるが、このうち MIA (Pāli) *pattiyisyanti* : BHS *pattīyisyanti* : Skt. *pratīyisyanti*⁸⁾ の異読 3 語が出現する。14 種類の SP

写本と SP 基準テキスト KN について、この異読が出現する8対応箇所を調査し、表1に集約させた。この異読は偈文には存在せず、散文だけに出現する。CA 伝本古年代写本に MIA (Pāli) *pattīy*^o と BHS *pattīy*^o が、CA 伝本新年代写本・G-N 伝本古年代／中年代写本に BHS *pattīy*^o が出現し、Skt. *prattīy*^o が出現しない、G-N 伝本新年代写本には上記の異読3語が出現している。

表1 梵文法華經写本における異読 MIA *pattīya*^o: BHS *pattīy*^o: Skt. *prattīy*^o の出現箇所
* [] 内数字は SP の章番号, () 内は書写年代を示す

中央アジア (CA) 伝本		ギルギット・ネパール (G-N) 伝本			写本混淆校訂本 (SP 基準テキスト)	
古年代	新年代	古年代	中年代	新年代		
Lü; M; FB; Kh; F1-6 (5-9世紀)	O (9-10世紀)	D1; D2a; D2b; D3a; D3b; D4 (6-7世紀)	C5 (1064-1065)	R (1802-1803)	KN (1910-1912)	
〈1〉	----	<i>pattīy</i> ^o 43a4	<i>pattīy</i> ^o D1-15a [24.9]	<i>pattīy</i> ^o 11b3	<i>prattīy</i> ^o 15b5	<i>prattīy</i> ^o [2]36.7
〈2〉	----	<i>pattīy</i> ^o 44a4	<i>pattīy</i> ^o D1-15a [24.28]	<i>pattīy</i> ^o 12a1	<i>prattīy</i> ^o 16a3	<i>prattīy</i> ^o [2]37.10
〈3〉	----	<i>pattīy</i> ^o 45b7	----	----	----	([2]39.9)
〈4〉	----	<i>pattīy</i> ^o 52b3	<i>pattīy</i> ^o D2a-15a [188.23]	<i>pattīy</i> ^o 14b3	<i>pattīy</i> ^o 19a5	<i>pattīy</i> ^o [2]44.3
〈5〉	----	<i>pattīy</i> ^o 221a3	----	----	----	([10]232.9)
〈6〉	<i>pattīy</i> ^o FB20b7	<i>pattīy</i> ^o 272b7	<i>pattīy</i> ^o D3b- 3175.5	<i>pattīy</i> ^o 92a5	<i>pattīy</i> ^o 103a3	<i>pattīy</i> ^o [13]286.8
〈7〉	<i>pattīy</i> ^o FB21b8	<i>pattīy</i> ^o 274b3	----	----	<i>pattīy</i> ^o 103b5	<i>pattīy</i> ^o [13]288.5
〈8〉	<i>pattīy</i> ^o FB36a5	<i>pattīy</i> ^o 300b2	<i>pattīy</i> ^o D1-114a [108.29]; D3b- 3189.4	<i>pattīy</i> ^o 101b5	<i>pattīy</i> ^o 112b2	<i>pattīy</i> ^o [14]312.9

書写年代順に従って、CA 伝本では表1の〈7〉、〈8〉により、MIA *pattīy*^o から BHS *pattīy*^o に、G-N 伝本では表1の〈1〉、〈2〉により、BHS *pattīy*^o から Skt. *prattīy*^o に書き換えられている。G-N 伝本新年代写本 R では表1の〈6〉、〈7〉に MIA *pattīy*^o が見られる。このことについて、表1の〈6〉では、上表以外の SP 写本のうち P3 (パリ・アジア協会蔵本、書写年代19世紀) が R と同じ異読 (MIA *pattīy*^o) であるものの、7種類 SP 写本が BHS *pattīy*^o とあり、その他の SP 写本にはこれに対応する異読が存在しない。また表1の〈7〉では、ほとんどの SP 写本で Skt. *prattīy*^o とある。以上のことから、SP 写本の伝承過程で BHS *pattīy*^o から MIA (Pāli) *pattīy*^o と書き換えられたとは考えにくく、MIA (Pāli) から Skt. とされた可能性が高い⁹⁾。

3. 梵文法華經の韻律の特徴——接頭辞 pr° を含む偈文の韻律——

KNの短母音+接頭辞 pr° を含む偈文には401句が存在する。このうち、KNや現存するすべてのSP写本偈文（欠損や解説不能箇所、接頭辞 $p^\circ/pp^\circ/pr^\circ$ 以外の異読を除く）にはMIA接頭辞 p°/pp° が存在せず、すべてSkt.接頭辞 pr° である。これら401偈文句は次の3つに分類できる：(a) MIA接頭辞 p° とすることで韻律に従う215句；(b) Skt.接頭辞 pr° のままでも韻律に従う68句；(c) MIA / Skt. どちらでも韻律に従う118句¹⁰⁾。SP写本が伝承される中でMIA (Pāli) からSkt. に書き換えられたとすれば、(a) のようにSkt.接頭辞 pr° をMIA接頭辞 p° と置き換えればよいが、それによって韻律に従わなくなってしまう偈文句 (b) が68句も存在する。

4. 梵文法華經と他仏典の並行・類似偈文句の存在

SP写本偈文句 (a) では、初期仏典とMvとの並行・類似偈文句¹¹⁾ が多数見られるのと同様に、MIA接頭辞 p°/pp° からSkt.接頭辞 pr° に書き換えられた可能性がある。SP偈文の接頭辞 pr° を含む句について、SPと主要な初期仏典（『スッタニパータ』(Sn)、『ダンマバダ』(Dhp)、『テーラガター』(Th)、『テーリガター』(Thī)、『ジャータカ』(Jā) やBHS經典古層に分類されている『マハーヴァスツ』(Mv) や『ラリタヴィスタラ』(Lv) 偈文と対照したところ、以下の6種の並行・類似偈文句を見出すことができた。このうち(1)–(3)が並行偈文句、(4)–(6)は類似偈文句である（接頭辞 $p^\circ, pp^\circ, pr^\circ$ の下線部は筆者が付記した；当該箇所を[SP章]、Sn, Th, Thīでは偈、Jāでは巻数・頁・偈、Mv, LVでは章・偈、SPでは頁・偈の位置番号を示した）。

並行偈文句：(1) KN [3] 69.33a: *dharmacakraṃ pravartesi*; O [III] (1) (=33) a: *dharmacakkraṃ pravartesi*; Sn 556d, Th 826d: *dharmacakkaṃ pavattitaṃ*; Jā I-27.193d: *dharmacakkaṃ pavattaya*; Jā I-27.193b: *dharmacakkaṃ pavattayaṃ*; Mv 26.26c: *dharmacakraṃ pravartesi*; Mv 95.16c: *dharmacakraṃ pravartesi*; Mv 96.1c: *dharmacakraṃ pravarteti*; LV 26.10d: *dharmacakraṃ pravartayitā*; LV 24.100d: *dharmacakraṃ pravartayet*. (2) KN [5] 139.53d (O対応箇所なし): *dhamaṃ deseti prāṇināṃ*; Thī 306d: *dhamaṃ desesi pāṇinaṃ*; Thī 317d: *dhamaṃ desesi pāṇinaṃ*. (3) KN [25] 462.1b (O対応箇所なし): *pravrajyāṃ anagārikāṃ*; Thī 311d: *pabbajī anagāriyaṃ*; Th 108b, 512d, 912d, 1255d; Thī 90b, 98d, 124d, 137b, 150b, 156b: *pabbajīṃ anagāriyaṃ*; Mv 49.57d: *pravrajī anagāriyaṃ*.

類似偈文句：(4) KN [14] 310.40d (= O [XV] (4) (=40) d): *uduyukta rātriṃdivaṃ apramattāḥ*; Sn 507c: *rattiṃdivaṃ satataṃ appamatto*. (5) KN [17] 351.2c: *anumodayitvā ca*

prasannacittaḥ; O [XVIII] (1) (=2) c: (*anu*) *modi prasannacitto*; Sn 403c: *pasannacitto anumodamāno*; Jā IV-76.136c; VI-202,873c: *pasannacitto anumodamāno*. (6) KN [1] 23.60c: *nāmena vaipulyam idaṃ pravucyati*; O [I] (4) (=60) c: *nāmena vaipulyam idaṃ pravucyate*; Sn 808b *yesaṃ nāmaṃ idaṃ pavuccati*.

上記のうち (5) の KN では韻律に従わないが, Skt. *prasannacittaḥ* を MIA (Pāli) *pasannacitto* と置き換えることで *Triṣṭubh* となる. また偈文句 (b) では, 菩薩の名前 (*varaprabha*, *padmaprabha*) や, 類似偈文句 (4) と同様に Skt. $^{\circ}pr^{\circ}$ が MIA $^{\circ}pp^{\circ}$ となる句, MIA *bahūpakāra-*: Skt. *bahuprakāra-* を含む句などであり, これらの句は MIA でも Skt. でも韻律に従う偈文句 (c) に帰着する. SP 偈文と同様に Mv や LV 偈文でも MIA 接頭辞 p°/pp° が存在せず, Skt. 接頭辞 pr° だけが存在し, かつ Mv や LV と SP の並行・類似偈文句が多く存在する¹²⁾.

5. 結論と今後の研究の方向性

Kern などの研究者は, 韻律に従わない接頭辞 pr° を含む SP 偈文において, Skt. 接頭辞 pr° を一子音と見做すことで韻律に従うとした. だが, 当該箇所を一子音とすると韻律に従わなくなる偈文が存在する.

一方, 初期仏典と Mv, LV には, 多くの並行・類似偈文句が知られているが, Mv, LV 偈文では SP 偈文と同様に Skt. 接頭辞 pr° のみが見られ, MIA 接頭辞 p°/pp° が存在しない. また表1の異読3語 (MIA (Pāli) *pattiy^{\circ}*: BHS *pattiy^{\circ}*: Skt. *pratīy^{\circ}*) は, 韻律に制約されない散文だけに存在するが, SP 書写年代順に MIA 接頭辞 p°/pp° から Skt. 接頭辞 pr° に書き換えられた梵語化の傾向を示している. さらに, 韻律に従わない SP 偈文句 (b) については, 菩薩の名称や類似偈文句 (4) のように Skt. $^{\circ}pr^{\circ}$ を MIA にした場合に $^{\circ}pp^{\circ}$ となる句, また MIA *bahūpakāra-*: Skt. *bahuprakāra-* を含む句などであり, これらは MIA でも Skt. でも韻律に従う偈文句 (c) に帰着する. 加えて Mv, Lv, SP の並行・類似偈文句が多く存在することから, Mv や LV の偈文を参考にして, 初期 SP 偈文が編纂された可能性が高い.

以上のことから, SP の Skt. 接頭辞 pr° を含む偈文では, 韻律に従わない箇所を Skt. 接頭辞 pr° を一子音と見做す読み方・発音法とするのではなく, 韻律に従う／従わないにかかわらず当該箇所を MIA 接頭辞 p°/pp° と置き換えていると解釈できる. このことは, 初期 SP は MIA で編纂され, 伝承される中で梵語化された可能性を示す一つである.

SP 偈文では接頭辞 pr° のほか接頭辞 $kṣ^{\circ}$, $jñ^{\circ}$, jy° , br° , st° , sp° , sv° などが散見される

1990. **Jā: Jātaka with Commentary.** 6 vols. Ed. V. Fausbøll. London: Pali Text Society, 1877–1896. **LV: The Lalita Vistara.** Ed. P. L. Vaidya. Buddhist Sanskrit Texts, no. 1. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1958. **Bechert, Heinz. (1976) 1977.** “Foreword.” In *Saddharma-puṇḍarīka-sūtra Kashgar Manuscript*, ed. L. Chandra, 3–9. Śāta-piṭaka Series, vol. 229. Tokyo: Reiyukai. **Brough, John. 1954.** “The Language of the Buddhist Sanskrit Texts.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 16(2): 351–375.
- Edgerton, Franklin. 1946.** “Meter, Phonology, and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit.” *Journal of the American Oriental Society* 66: 197–206. **Ishida, Chiko. 2016.** “A Historical Overview of the Discovery and Study *Saddharmapuṇḍarīka* Manuscripts.” In *Mitomo Kenyō hakushi koki kinen ronbunshū Chie no tomoshibi: Abidaruma bukkyō no tenkai* 三友健容博士古稀記念論文集 智慧のともしび：アビダルマ佛教の展開, 456–492. Tokyo: Sankibō Busshorin. **Karashima, Seishi. 1992.** *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra in the Light of the Sanskrit and Tibetan Versions.* Bibliotheca Indologica et Buddhologica 3. Tokyo: Sankibo Press. _____ . 1997. “Some New Viewpoints on Philological Studies of Early Mahāyāna Texts.” *Buddhist Studies* 仏教研究 26: 157–176. _____ . 1998. *A Glossary of Dharmaraka’s Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典. Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica 1. Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University. _____ . 2001. “Some Features of the Language of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra.” *Indo-Iranian Journal* 44(3): 207–230. _____ . 2006. “Underlying Languages of Early Chinese Translations of Buddhist Scriptures.” In *Studies in Chinese Language and Culture: Festschrift in Honour of Christoph Harbsmeier on the Occasion of His 60th Birthday*, ed. Christoph Anderl and Halvor Eifring, 355–366. Oslo: Hermes Academic Publishing. _____ . 2016. “The Triṣṭubh-Jagatī Verses in the *Saddharmapuṇḍarīka*.” *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* 19: 193–210. 荻原雲来・土田勝弥編 1934–1935 『改訂梵文法華經』山喜房佛書林。辻直四郎 1970 「法華經の言語」金倉圓照編 『法華經の成立と展開』平楽寺書店, 3–21. 西康友 2015 「中央アジア系写本の梵文『法華經』における *kṛdāpanaka*-について」『東洋文化研究所所報』19: 1–18. _____ 2017 「梵文『法華經』における *sāntika*- / *santika*- / *antika*- の用例」『印仏研』66(1): 386–390. _____ 2021 「『ケルン・南條本』に示された異語の検証——梵文法華經写本における梵語化検証の可能性——」『中央学術研究所紀要』50: 129–152. 水野弘元 1981 「法句經対照表」『法句經の研究』春秋社, 73–261. _____ 1992 「『スッタニパータ』の偈や經の対応表」『佛教研究』（国際佛教徒協会會）, 21: 2–56. _____ 1995 「Udānavarga を柱とした諸法句經の偈の比較対照表」『佛教研究』24: 5–76. 矢島道彦 1997 「Suttanipāta 対応句索引」『鶴見大学仏教文化研究所紀要』2: 1–97. 山崎守一 2018 『古代インド沙門の研究』大蔵出版。

(本研究は JSPS 科学研究費補助金 (科研費) JP21K00058 の成果である)

〈キーワード〉 法華經 (*Saddharmapuṇḍarīka*), 法華經成立編纂伝承過程, 仏教混淆梵語 (Buddhist Hybrid Sanskrit), 韻律の制約 (*metri causa*), 梵語化 (Sanskritization) (中央学術研究所学術研究室主幹, 身延山大学国際日蓮学研究所研究員, 博士 (仏教学))